

八重賞 『「無形」を紡ぐ』 立川 愛華

落語は「無形」である。そう実感した瞬間から、ただ楽しいだけではない、ある種の焦燥のような感情が私の内に生じた。それを打ち消してくれたのが、「世の中すべて気魄、仕事にして気魄の強き者が最後の勝利を得るにいたるなり」という新島襄の遺した言葉であった。

高校1年生の冬、逡巡の末、江戸の落語研究会へ入部し、何と3か月後には全国大会に出場してしまった。ひとえに顧問が社会人落語世界一という僥倖の賜物なのだが、大舞台を終えた私は、一生もの、生涯をかけて追求したいものに出逢ってしまった、と歓喜とも畏怖ともつかない情動に吞まれていた。

日々の稽古も時を忘れるほど楽しく、同時に落語の歴史、着物や小道具、立ち居振る舞いなどについても関心は抑え難く、どうすればもっと良い落語になるかという思いは膨らむ一方だった。

稽古を重ねる程に痛感するのが、極限まで無駄を削いだゆえのごまかしのきかなさだ。情報過多の現代にあって、落語は筋も簡素で内容も刺激に乏しい。さらに、口調や声音、表情と向き、扇子一本と身振り手振りで、全てを伝える技量が必要となる。

しかし、それだけでは全く不十分であることは、棒読みのシェイクスピア、楽譜をなぞるだけのモーツァルトを想像すれば分かる。つまり、古今の名人によって伝え尽くされてきたテキストに、話し手が自力で血を通わすことで、そのストーリーが息を吹き返したように、あるいは今生まれたかのように現しめ、事前にオチもバレている上で、聞き手を愉快な気持ちにするという難題が待っているのだ。腕前を磨き、そしてテキストを蘇生することで生じる、一瞬の閃光のような場と時を笑いながら共有することが落語であり、ゆえに無形なのだ。

大言するなら、私はあの舞台でその欠片を味わってしまったのだ。場の呼吸やリズムが同調し、歯車が噛み合うように高揚し、連綿と受け継がれてきたテキストが脈打つ瞬間を。この形の無いものは、誰かが次代に伝えねば絶えてしまう、ならば私がその役を担おう。そのように決心したきっかけこそ、新島による冒頭の言葉である。

しかし、そもそも同年代に限らず、落語に取り組むどころか、関心のある人が多いとは言えないという事実は厳然として存在する。だが、そんなことを言っていては何も始まらない。であれば、私が魅力の片鱗でも伝えられるように精進しよう。労を厭わず、あらゆる方面から理解を深めよう。

「自由と良心」を重んじるキリスト教精神に6年間の学びを得た者としても、心底から自己を、およびキリスト教精神を信じ切り、不撓不屈の熱い意志で道を切り拓いてきた新島襄の生き方を知るにつれ、恐れず突き進んでみようという気概が湧いた。彼の熱い言葉の数々に心が共鳴し、胸中の曇りがきれいに晴れた。

落語に打ち込むことも、研究することも生半ではなく、生涯をかけるに余りあるだろう。だが、「世の中の事はすべて根気仕事である。根気の強いものが最後の勝利を得る」と新島が教える通り、悔いの無いよう生き切るしかないのだ。私はもう踏み出した。その歩みをより確固たるものにするのである。落語の世界から言葉を尽くして橋を架けるのだ。